施工者に幸あれ 第55回

# 的確に寄り添う構造

## 構造家・星野修一

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■黒川紀章事務所

覇志堂と青山の表参道で落ち合い，コムデギャルソンを通り過ぎて事務所へ行く。名刺交換を終えて椅子に腰を下ろすと，構造家の星野修一さんは小気味好く話し始めた。キャリアの始まりは黒川紀章の事務所。入社してすぐ，構造部門に配属された方です。

「何も知らない，ペイペイだった」のに，80名以上の所員のなかに，構造を担当する先輩はいなかった。最初から，協力構造事務所や社外の構造家の窓口からクライアントとの予算調整も担っていたといいます。黒川先生へ報告して了解を取り付けるのが，一番のハードワークだった。巷では名古屋の締まり屋といわれていたという先生を相手に，格闘していたのでした。意匠担当の人も，クライアントより黒川先生に対しての方が，数倍緊張したというプレゼンテーション。星野さんも，そのぴりぴりした雰囲気をよく覚えている。

が，1日2回の社内の見回りがあって，ざっくばらんにデザインの話などをしていた黒川先生でもありました。「建築家・黒川紀章だけを見て仕事をしていた。先生が構造の専門ではなかったのが幸いで，のびのびやらせてもらった」と語る星野さんの目は青年のよう。しかし，冷静に「構造の監修コーディネーター。手配師でしたね」とも分析する。若かったからこそ乗り越えられた，一流の体験だったことは間違いなし。

■独立まで

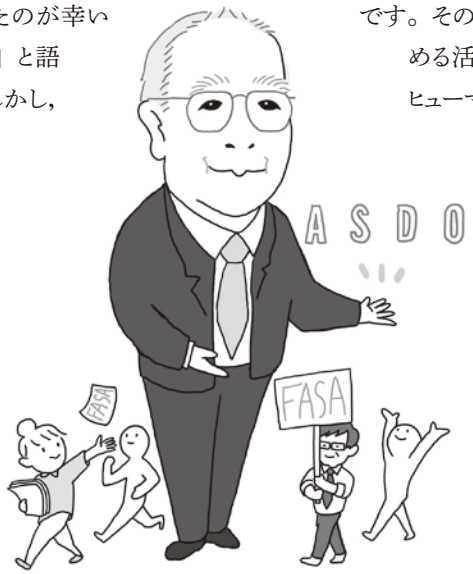
どんなキッカケで黒川事務所を辞めたのか気になった。明快に「福岡県庁舎の現場監理をしていた時に，このまま，実施ができない構造家で終りたくないと，強い気持ちが湧いてきたから」「手が動くうちに！」と決断。一流の建築家の下で，他者から見ると羨ましい仕事をしていたはず。このまま続けても自分で構造設計をしたことにはならないと，思ったそうです。心の芯には，師であった大構造家・松井源吾の技術者魂がありました。自分以外の構造家がプロっぽく見えていた星野さんは，そのあと5年間も先輩の事務所で実施を積んでからプロの構造家として念願の独立を果たしたのでした。

難しい役目を果たしていた若い所員を，おそらく離したくなかった黒川先生だったろう。「辞めても自分の仕事を手伝うならOK」と許されたのでした。黒川先生の仕事が途切れたことはなかったのは，いうまでもありません。

■ヒューマンに惹かれて

東京の山の手育ちの星野さんは，いまだに，幼なじみの仲間たちと飲み会をするそうだ。友達が他の大学に行くなか，早稲田大学で建築を学ぶ選択をした。学科のパンフレットにあった「ヒューマン」という言葉が，心に入ってきたからといいます。構造に惹かれたのも，松井源吾先生の威光の成せること。研究室では，構造の何たるかは当然として，仕事の流れと，お付き合いの基本を叩き込まれたという。

東京構造設計事務所協会（ASDO）では，東京都福祉局とタイアップして構造の相談を受けたりしている。構造設計事務所の健全な経営基盤を確立することを，基本として設立されたその一般社団法人です。その会長として構造設計の役割を広める活動も，星野さんのライフワーク。ヒューマンはここでも続いているのですね。




2014年にプリツカー賞を受賞した建築家の坂茂さんとは「VILLA KURU」（1990年）が，構造設計を依頼された初めての建物。それ以降親密なお付き合いが続いている。

星野修一さんの帰宅は，表参道からロマンスカー通勤。ゆとりある心で仕事ができる風が，星野さんの周辺には吹いているようです。